九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

典論論文と文賦

林田，慎之助

https://doi.org/10.15017/2332705

出版情報：文學研究. 75, pp.45-66, 1978-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

典論論文と文賦

林田慎之助

一

曹丕の『典論』論文と陸機の「文賦」は魏晋の時代に比較的活発にあらわれてきた文学批評の論著のなかで、中国文学思想史を飾る記念碑的作品とみなされてきた。それは両者が六朝文学の方向を予知し、決定づけるちからを内在させた文学理論であったことにもよるが、しかしながらなによりもそこに、その時代にふさわしい新鋭な文学価値観の樹立があり、言語表現の形象化に関する独創的な意見が存在していたからである。

『典論』論文は曹丕が魏の文帝として即位する直前、いまだ皇太子の身分であった建安二二年（二一七）の頃に作られたものとみられている。[1] 陸機が呉の国に生をうけたのはそれからおくれることほぼ四五年後、呉の景帝の永安四年（二六一）である。その彼が『典論』論文に言及した発言は、今にのこる彼の文集のなかにさがすことはできない。しかしそれを読む機会はかなり早くから準備されていたとみられる状況証拠がある。『三国志』魏志の文帝紀の末尾の記事に曹丕の文学愛好と皇覧の編纂をのべた条りがあるが、そこに付された裴松之の注に、胡冲の「呉歴」が引用されている。

帝（曹丕）は素書して著す所の典論及び詩賦を以て孫権に餉（おく）る。又紙書に写せる一通を以て張昭に与う。

曹丕が自作の『典論』と詩賦を書写して、呉の主権者孫権とその重臣張昭に贈ったというのだから、この時『典

論』論文も呉に到来したことになる。それは何時のことであろうか。

この時の事情を念のために『三国志』呉志の孫権伝から逆照射してみると、呉の黄武元年の記事の条りの裴松之の注に、やはり次のような「呉歴」の記述が引用されている。

（孫）権は使を以て魏に聘る。具に（劉）備を破り、獲しところの印綬及び首級、得る所の土地を上し、幷せて将吏の功勤を表し、宜しく爵賞の意を加うべしと。文帝は使を報いて、鼲子裘、明光鎧、騑馬を致し、又素書して作る所の典論及び詩賦を以て孫権に与う。

珍奇な贈品と一緒に『典論』が写されて、呉の孫権に与えられたのは、蜀の劉備軍討伐に功績をあげた孫権の労に報いるためであったし、その時は、呉の黄武元年（二二三）、魏の年号でいえば、黄初三年のことであったことは間違いない。

『典論』論文と陸機の関係をみる場合は、留意すべき重要人物が介在している。それは「呉歴」の記事が『典論』を贈られた人物として呉主とともにあげた張昭である。この張昭（一五六―二三六）こそは陸機の母の祖父、つまり陸機にとって外曽祖父にあたる人物であった。

それでは、なぜ曹丕は呉主ばかりではなく、紙書した『典論』を呉の重臣とはいえ張昭にまで贈ったのであろうか。『世説新語』賞誉篇をみてみると、「呉四姓舊目に云う。張は文、朱は武、陸に忠、顧は厚なり」というのがそれである。張氏は戦国時代に屈原を生んだ屈氏に匹敵する知的な家柄であったことをこれは物語っている。知識人の尊崇をうけるに価いする文化的寄与をのこしてきた家柄であることは、呉の国内に限らず、つとに魏の国にも知られていて、一世の文化人、風雅の文士をもって自負していた曹丕であるだけに、彼はわざわざその家系を尚び、その当主張昭に自らの『典論』を贈ったものと思われる。

陸機のなかにながれるすぐれた文学的資質はおそらくは父方陸氏の忠の血統よりも、より多くは母方張氏の文の血

統を受けついだものであろう。「少くして異才有り、文章世に冠たり」（晋書・陸機伝）といわれた陸機だけに、この母方の家宝として珍重されていたであろう誇り高き伝世品――『典論』の存在には深い関心を払い、それを親しく手にとって読みとる機会を持ったはずである。

『典論』が陸機の目に触れる機会は身近かに、しかもかなり早い時期に準備されていたことは確実である。ただしかしこの資料をもってそれを読み、それを意識において後年陸機が「文賦」一篇を著したといえる決定的な状況証拠とすることはできない。とすれば現在我々に残された論証の手続としては、『典論』論文と「文賦」を比較して、後者が前者から受けた影響の痕跡を捜す方法いがいにはないであろう。

二

『典論』論文は「文章は経国の大業にして不朽の盛事なり。年寿は時有りて尽き、栄楽は其の身に止まる。二者は必至の常期なり。未だ文章の無窮なるに若かず」とのべる有名な文学価値説、気を基軸にすえた文学創造力理論、そこから遠心的に展開される文体論、建安七子の文才論と極めて多岐にわたる批評的機能が発揮されている。劉勰が「魏典は密なれども周かず」（文心雕龍・序志篇）と批判しているように、『典論』論文は批評すべき対象に密着して、その文才と文体との関係を考察する精密性を具えてはいるが、なお文学批評理論としての構想と方法において周到な配慮が欠けている。

「文は気を以て主と為す」という「気」を基軸とする文学創造力理論は曹丕に始まる。その際の文は詩賦散文の総称であるが、作家の内面に存在している気が働いて、各々特色のある文学作品が制作されるとみて、これを重視する理論である。劉勰の『文心雕龍』の文学創造力理論の周到な構想からすれば、実に単純にして明快である。

気の清濁に体有り。力強て致すべからず。諸を音楽に譬うれば、節奏、検を同じくしても、引気齊しからざれ

ば、巧拙素より有り。父兄と雖も子弟に移す能わず。

これは文学創造の個性的表現を決定的に左右する因子を気にみたて、それに解説をあたえての論理である。音楽演奏で曲譜が全く同じものであっても、それにのっとって楽器を吹奏する人間の側で「引気」が異なるので、自然そこに巧拙の差が生じてくるのは当然だとする曹丕は極めて素朴な生理的気息論に立脚している。肉体の気息に生得の強弱清濁の差があるように、それに左右される気力の差が人間によってあることを認めている。[2] この創造力となる気を文才論、文体論に拡大してゆくと、作家には生得の気力があるからには、それにふさわしい文体を選ばねばならぬし、表現様式として器ともいえる或る種の文体にそぐわない気力の持主である作家が、その文体の枠組のなかでいくら努力を積み重ねてみても、すぐれた個性的な文学創造に到達することは不可能であるということになる。

要するに曹丕の所謂「気」は気息から出た気力であり、気力の差に関係する個性とおきなおすことができる。父子相伝、兄弟相伝のかたちをとっても伝達不可能なものが作家の気力であり個性であるとすれば、曹丕の文学創造力理論は一種の宿命論、決定論的な発想に立脚していると考えられる。そこには後天的に涵養される教養、或は模倣にはじまる文章制作の工夫の営為が文学創造力の糧となるという発想が入りこむ余地はない。

この点になると、陸機の「文賦」が提出した文学創造力理論は頗る対蹠的な様態をみせている。

中区に佇みて以て玄覧し、情志を典墳に頤う。四時に遵って以て逝くを歎き、萬物を瞻て以て思い紛る。落葉を勁秋に悲しみ、柔き條を芳春に喜ぶ。心は懍懍として以て霜を懐き、志は眇眇として雲を臨む。世徳の駿烈を詠じ、先人の清芬を誦す。文章の林府に遊び、麗藻の彬彬たるを嘉す。慨として篇を投じて筆を援り、聊か斯の文を宣ぶ。

作者を文学創造にかりたてる衝動がどこからやってくるかをのべる陸機は外物に発触される情感のはたらきにはまず注意深く留意している。更には創作の衝動が古典を読んで情志を涵養する過程からも生じてくることをも見落して

いない。先人の遺徳に感動し、豊かな文学の宝庫に遊び、典正な文章の美しさを玩賞することによって、作者はよりすぐれた文学達成をめざして意欲的な創作にとりかかるのである。古典的教養主義ともみえる陸機の創造力理論はそのために曹丕の閉じられた宿命論的なそれを大きく踏み出していた。これは陸機が『典論』論文を意識することで否定的にのりこえることができた新しい文学理論の創出とみることのできる顕著な一例である。郭紹虞氏は「文賦」に天才強調論が開陳されてあるとみているが、それはむしろ曹丕の文学主気説のなかに発見すべきであろう。

三

陸機の「文賦」は当時の文学思潮なり、個々の具体的な詩人なりを批評の対象とすることはついになかった。それに対して『典論』論文は曹丕にとっていわばかけがえのない文学交游の仲間であった建安の七子の文学活動をとり出し、その文才のはたらきがどのような表現様式のなかで発揮されてきたかという問題を論評している。

王粲は辞賦に長ず。徐幹は時に齊気有り。然れども粲の匹なり。粲の初征、登樓、槐賦、征思、幹の玄猿、漏巵圓扇、橘賦の如きは張（衡）蔡（邕）と雖も過ざるなり。然るに他の文に於ては、未だ是に称う能わず。(陳)琳、(阮)瑀の章表書記は今の儁なり。應瑒は和にして壯ならず、劉楨は壯にして密ならず。孔融の體気高妙なるは人に過ぐる者有り。然るに論を持する能わざれば、理の詞に勝たざるなり。雑うるに嘲戯を以てすること及び其の善き所に至れば、揚（雄）班（固）の儔なり。

王粲、徐幹の文才は斉気で辞賦に長じ、陳琳、阮瑀は章表書記にすぐれ、孔融は体気高妙で議論文に卓越しているとみているが、應瑒、劉楨が「和而不壯」「壯而不和」というのは、なお如何なる文体においてそうであるのか不明である。曹丕の「与呉質書」をみると、「徳璉は常に斐然たる述作の意有り、其の才学は書を著すに足れり」といって應瑒を品評し、劉楨については「公幹は逸気有り。但だ未だ遒しからざるのみ。其の五言詩の善き者は時人に妙絶す」[8]

と論じているところからみて、劉楨の「壯にして和ならざる」ものは、彼の内にある逸気にかかわるその詩風に対する批評であったと考えられる。晋の李充の『翰林論』が「應休璉、五言詩百数十篇、風規治道を以てす。蓋し詩人の旨有り」と論じて、應瑒の五言詩に非常に高い評価をあたえているところから考えて、「和にして壯ならざる」ものはこれまた應瑒の場合も詩経の詩人の旨にかかわるその詩風にむけての批評であったとみなしてほぼ間違いあるまい。

斉気、逸気、体気高妙というのは生理的な気息、語気を含む文章の個性的な風格を指しての評語であり、所謂文学主気説を基軸として創出された評語であった。

後漢末の混濁した政治的局面のなかから清議がおこり、人物品評の風気が助長されてきた。それは郭林宗、許劭などの人物月旦にはじまるといわれているが、その風気が文学界に反映して文学批評が盛んになったとみる意見はすでに郭紹虞氏にある。[4] おそらくは『典論』論文の文才論も、それが建安期の七人の代表的作家の人物品評をからませての文才論であることからして、やはり魏晋期特有の社会的風気の一所産とみるべきであろう。

とりわけ曹丕の著作として『士操』一巻の書名が隋書経籍志に記載されているのは留意に値する。書名から判断して魏の劉劭の『人物志』三巻、梁の姚信の『士緯新書』十巻などとともに人物評論に関する作品であったとみられる。後漢の清議にはじまる人物評論は建安期に至って益々流行することになるが、この時期から以降、人物の才性を具体的に研究する名理学が派生している。これは清談論議の一種であるが、そもそもは曹丕が魏の文帝になった際に、人材登用の方法としてつくった九品中正制度によって促進されてきた論議であった。九品中正制度は郡、州に、小中正官、大中正官を設け、この中正官が郷党の人材を発掘し品第して、最後は吏部尚書の人選にゆだねるかたちで推挙する制度である。その際、人物の言行、風采、人品を郷党の世論に照して品第するのがたてまえであった。かかる社会的制度と風気のなかで、曹丕の『士操』などの著書が人物品評を受ける側の人々にとって一種の手引或いは教科書として歓迎されたと想像される。

『典論』論文よりやや早く書かかれた曹植の「与楊徳祖書」もこの時期の代表的な文学批評論の一つとみなされているが、その中で「劉季緒の才は作者に逮ばざると雖も、好んで文章を詆呵し利病を掎摭す」と述べておるような風潮がすでに曹魏の文壇に支配的であったとみられる。こうしてみれば、曹丕の『典論』論文の文才批評が当時の文人の注目を集めたばかりではなく、その後の文学界にかかる形式の批評的風潮を確実に植付けることになつた。その意味で文学思想史の上で『典論』論文が与えた影響は甚大であるといわねばならぬ。

陸機の「文賦」は表面的にみれば、具体的な文才批評が機能されていないために、清談の人物品評の才性論と無関係であったかのようにみられるが、実はそうではない。たしかに陸機の批評的関心はもつぱら先人及び自己の内なる文章制作の心理的作用の解析にむけられており、彼の冷徹な批評的視点はひたすら文学創造の内的工程にすえられていた。それを闡明にするものは「文賦」に寄せて、それを制作した動機にふれる彼自身の序文である。

余は才子の作る所を観る毎に、竊かに以て其の用心を得る有り。夫れ言を放ち辞を遣るは良に變多きも、妍蚩好悪は得て言う可し。自ら文を属る毎に、尤も其の情を見る。恒に意は物に稱わず、文は意に逮ばざるを患う。蓋し知るの難きに非ず、能くするの難きなり。故に文の賦を作りて作文の利害の由る所を論ず。佗日殆ど其の妙を盡すと謂う可し。

この「文賦」制作の動機論の中核的な主題は「意不稱物、文不逮意」から導かれている。作者の意（構想）と表現しようとする対象（物）がぴったりこない状態、言語表現（文）も又作者の意（構想）を充分に盡しきれない事態を歎き、これをなんとか解決する方法はないかと考えた陸機がまず批評家として他人の文章を分析し論評するよりも、実作者の立場から自分の文章制作のいとなみを分析し、文章の美醜巧拙の原因をつきとめようとしたのである。

「意は物に稱わず、文は意に逮ばず」の句は易の繫辞伝にある「書は言を盡さず、言は意を盡さず」の句を踏まえての発言であるといわれている。この指摘を含めて、「文賦」の主旨を詳細且つ平明に分析した小尾郊一氏の「陸機

の文賦の意図するもの」と題する論文によるとこの時代の清談の論材として「言不盡意」がとりあげられていた事情が別にある。『芸文類聚』巻一九に西晋の欧陽堅石に「言は意を盡す」の論が残っている。それによると、魏晋期の清談家で名理派として活躍した鍾會・傅嘏の才性論のなかに「言は意を盡くさず」の論があって、それに反対する立場から「言は意を盡す」の論を展開したものらしい。[5]

傅嘏・鍾會については『三国志』魏志の傅嘏伝のなかに「傅は常に才性の同異を論じ、鍾は集めて之を論ず」とあるように、魏末晋初の才性論の中心人物である。才性論の才とは人間の才幹であり、性とは人間の性情を意味し、この両者の実質が同じであるか、異っているのか、離れたものであるのか、つながって一つのはたらきをするものであるかを論議の課題にすえたのが才性論である。これも又直接的には魏晋期の人物評論から出た人間論であり、才と性の関係に抽象的な考察を加えた思弁哲学であった。「尚書傅嘏は同を論じ、中書令李豊は異を論じ、侍郎鍾會は合を論じ、屯騎校尉王廣は離を論ずるも、文は多く載せられず」（世説新語・文学篇）というように、当時の著名な官僚知識人が才性論の討議に参加していた。西晋の欧陽堅石の「言は意を盡す」の論もこの才性論に包括される論議であった。西晋初期に呉から晋に入った陸機がかかる才性論に無関心であったとは思えない。むしろ異邦人として西晋知識人のなかに溶けこもうとしていた陸機だけに積極的を関心を抱いていたはずである。それを意識していたことを示すものが、「文賦」の序文の中核的主題としてすえられた「意不稱物、文不逮意」の発言である。とすれば『典論』論文と「文賦」がいずれも、魏晋期の思想的風潮であった清談を背景にして生れ、清談のなかでとりわけ才性論議と密接なかかわりをもっていたとみることができる。

曹丕は才性論を現実の文壇に活用し、建安七子の文才批評をおこなったが、陸機は才性論に触発されて、文学のより根源的な課題である文学創造の内的工程の分析というきわめて困難な批評的作業に取組んだといえるであろう。

『典論』論文と「文賦」が才性論の影響による所産であるとはいえ、両者の間に顕著にみとめられる外在批評と内在

批評の質的な違いがどこから生じたかをこれだけでは説明することはできない。この質的転換を可能にしたものは、魏末晋初の政権交替期にあらわれた人間の生存を脅かす不安な政治の状況とそれから引き起された深刻な思想の状況そのものであった。嵇康の音楽の賦・養生の論にみられる形而上学へのつよい関心と洞察、阮籍の詠懐詩を貫ぬく曇りない自己凝視、向子期、郭象の荘子注に展開され相対的価値思考の論理、そのいずれもが共通してみせた不可視的な世界との対話――かかる魏末晋初の思想と文学のいとなみがあって、陸機の「文賦」は文学創造の根源となるものを追求する内省的な文学批評理論を生みだすことができたとみるべきであろう。

四

文体論は曹丕と陸機の論文が共通して対象化したものである。曹丕は奏議・書論・銘・詩賦の八体をあげ、陸機は詩・賦・碑・誄・銘・箴・頌・論・奏・説の十体をあげ、それぞれの文体の特徴に短評を加えている。

曹丕が奏議といったいわば公的な散文から入っているのは古典的な文体観の反映であるし、陸機が詩賦から論じてゆくのは私的な抒情の文学をより重視していたからであろう。

この相異は両者の社会的な身分のちがい、文学観のちがいにねざすものと思われるが、その相異をこえて、両者の文体観には多くの共通性を発見できる。「奏議は宜しく雅なるべし」(典論)と「奏は平徹にして以て閑雅」(文賦)、「書論は宜しく理なるべし」(典論)と「論は精微にして朗暢」(文賦)、「詩賦は麗ならんと欲す」(典論)と「詩は情に縁りて綺靡、賦は物を体して鏤亮」(文賦)とを比較しただけでも、前者の文体論を意識して後者が文体の特質により綿密な論評を加えていることはあきらかである。

明の胡應麟は「文賦に云う。詩は情に縁りて綺靡とは六朝の詩の自りて生ずる所、漢以前に有ること無し。賦は物を体して鏤亮とは六朝の賦の自りて出ずる所、漢以前に有ること無し」(詩藪・外篇)と論じ、陸機の詩賦に関する

文体論が六朝詩賦の方向を決定したとみている。それまでの詩体の概念規定は「詩言志」説の範囲を一歩も出ていなかった。陸機が立徳立功と癒着しかねない志の概念をすてて、情の概念を前面に押し出すことができたのは、個人的な喜怒哀楽の感情を重視して、内発的な抒情美の発現に詩の本質があると認識していたからである。

賦に関していえば、西晋の摯虞が「象に假り辞を正し、其の志を敷陳す」（文章流別志論）と論じ、漢代の敷陳と諫戒を旨とする古典的な辞賦観にいまだとらわれていたのに比して、陸機が「物を映してきよらかな響きをもつ」ところに賦の文体の特質をみているのは、胡應麟が指摘しているように、抒情的な短賦がしだいに多くなってきた時代の辞賦文学の内質と動向を敏感にとらえていたからであった。

それにしても、曹丕が詩賦の文体的特質は麗、つまり美の表現にあるとみたのは、それとおくれる西晋の摯虞よりも早く、はるかに陸機の説にちかい創見であった。これよりしても、曹丕の文体論が陸機の文体思考に或る確信をあたえるほどの、決定的な影響をのこしているとみるべきである。

曹丕が文章に不朽の価値を認めた発言は『典論』論文の終章を飾るものであったが、陸機がすぐれた文学は金石に刻まれてその徳を広め、管絃にのせられて日々新たなる生命をもつと述べたのも「文賦」の終章においてであった。

文章は経国の大業にして不朽の盛事なり。年寿は時有りて盡き、栄楽は其の身に止まる。二者は必至の常期なり。未だ文章の無窮なるに若かず。是を以て古の作者は身を翰墨に寄せ意を篇籍に見す。良史の辞を假らず、飛馳の勢に託せず、聲名自ら後に伝わる。故に西伯は幽られて易を攘べ、周旦は顕れて禮を制す。隠約を以て務めずんばあらず、康楽を以て思を加さず。夫れ然り。則ち古人の尺璧を賤しみて寸陰を重んずるは、時の過ぐるを懼るるのみ。而るに人多く彊力せず、貧賤なれば則ち饑寒を懼れ、富貴なれば則ち逸楽に流る。遂に目前の務めを営むのみにして、千載の功を遺れ、日月上に逝き、体貌下に衰へ、忽然として万物と遷化す。

これは曹丕の文学価値説である。つぎに述べるは陸機の文学功用説である。

伊れ茲の文の用為るや、固に衆理の由る所なり。萬里を恢にして閡無からしめ、憶載に通じて津を為す。俯しては則を来芳に胎り、仰いで象を古人に観る。文武の將に墜ちんとするを濟い、風聲を氓びざるに宣ぶ。途の遠きとして弥らざるは無く、理の微なるとして綸めざるは無し。霑潤を雲雨に配し、變化を鬼神に象る。金石に被むらせて徳広く、管絃に流して日々新たなり。

曹丕において文章の価値が経国の大業に比定されていることは、なお文章に立功の事業とおなじ次元での功用性を認める発言であろう。然もこの文章のなかに、周の文王が著したとされる易経、周公旦によって整備された禮制をも含まれており、広義の文学概念として使用されていることと、それは関係しているであろう。それを認めた上で、この文章概念の主要な要素として、建安文学集団の構成員の各々が特意とした奏議、書論、詩賦等の純文学があったことを忘れてはならない。かかる概念にたつ文章はそれ自体の力で、文学者の聲名を千載にのこして不朽であるとみる曹丕の文学価値説には、かってみられなかった文学の独立が宣言されている。

陸機にあって文学価値説はすでに自明の理であったとみえて、もっぱら文学が時間と空間に相渉って風教の道をつたえる功用性に留意して、その徳広くして日々新たなる生命をたたえている。

曹丕が文王、周公旦の著述と礼楽にふれれば、陸機もまた文王、武王の道の再生を説いている。この二つの魏晋時代の文学論がいずれも、立功、立徳の功用性を論じながら、立文の価値を立功・立徳の価値と同列において、なおその日々新たなる生命の無窮性に注意を喚起していることの意義は大きい。この文学観の同質性においてもまた「文賦」は『典論』論文の連続線上にあるといえるであろう。

五

従来、「文賦」の制作年代については二説がある。一つは、杜甫の「醉歌行」にある「陸機二十作文賦、汝小年能

綴文」の句を手がかりに、陸機の二十歳の頃、西晋王朝に出仕する以前呉において制作されたとみる説である。だがこの説は杜甫が『文選』李善注でみたと推察される蔵栄緒『晋書』のあいまいな記述から、杜甫が思い違いをして二十歳説をひき出したと思われるふしがあるので、にわかに信じ難い。他の一つは、近人陳世驤氏の陸機四十歳前後説で、「歎逝賦」等の作品がつくられた晋の永康元年（三〇〇）の頃の作とみる説である。[6] そのもっとも大きな手がかりは、陸雲の「與兄平原書」のなかに、この時期前後に確実に制作された他のいくつかの陸機の作品とならんで「文賦」が論評されていることにある。今ここで、両者の説を詳細に紹介し、比較検討するだけの紙幅をもたないけれども、陳世驤氏の四十歳説には頗る説得性に富むものがある。この陳氏説にしたがえば、『典論』論文が書かれてから「文賦」が現われるまで、ほぼ八〇年の時間が経過したことになる。

この八〇年間の時間のへだたりは、これまでみてきたように、唯『典論』論文の連続線上に位置する「文賦」という図式のみでは到底とらえがたい、『典論』論文とは異質の独創性を「文賦」に発見することにつながってくるであろう。

郭紹虞氏は『中国古典文学理論批評史』で「文賦」の序文にみえる「夫れ言を放ち辞を遣るに、良に變多し。妍蚩好悪、得て言うべし」や「文賦を作るに、以て先士の盛藻を述べ、因って作文の理害の由る所を論ず」等の発言を引いて、陸機を形式主義文学理論の創始者とみなしている。それは「文賦」のどこを叩いてみても、現実とかかわる作家の意識の問題がとりあげられていないし、現実的課題の反映が陸機の文学創造理論の視野からは完全に切りすてられているからである。その点をおさえて郭紹虞氏は劉勰が『文心雕龍』総術篇で「昔陸氏の文賦は曲盡を為すと号せり。然るに泛論纎悉なれども、実體未だ該（そな）えず」と批評しているのは「一針で血を見る」ほどの核心をついた評語であると論じている。

この視点にたつ郭紹虞氏はさらに「関于文賦的評価」（文学評論・一九六三年第四期）と題する論文のなかで、詩経に

始源する「雅」の現実主義文学の路線と、楚辞に出発する「騒」の形式主義文学の路線が対立葛藤するかたちが中国文学史にあるととらえ、そのなかで「文賦」は楚辞路線を継承し、専ら言語表現の形象化に批評理論の焦点をあわせて、その「騒」路線を推進するに重要な役割を果した作品だとみなしている。

たしかに「文賦」のなかで、陸機は作家が現実にかかわってゆく際の意識について論じていないし、それを論ずることは彼の興味と関心の外にあったようにみえる。ことほどさように、陸機は意識的に多種多様な様態をとる作家の現実参加の問題にふれて論をすすめることを避けたのである。つまり「文賦」の創作構想にとりかかった陸機はこの問題を作家の個々の思想と意識に還元されるとみて、文学創造の内的工程の相をそこからひき出すこと自体に破綻があり無理があるとみていたのである。そのために「文賦」では、作家が文学創造の筆をおこすに至るまでの動機は、情志が四時の風物に感応することによって、古典や先人の美しく内容のある文章の読書体験を通じて感奮することによって導かれると、一般的なかたちで触れるにとどまっている。云換えれば、はじめから作家の意識が創作の際に現実をどう反映しているかという問題を除外した陸機は、文学における言語表現の形象化という技術論的方法に「文賦」の論文構想の焦点をあわせることによって、そこにあらゆる文学創造にたずさわる者が共有することのできる普遍的真理の発見が可能であると考えていたのである。その意味では郭氏の所謂形式主義文学理論の創造者とする陸機評価には妥当性を認めるが、その評価によって、陸機が言語表現による形象化の過程に分析の光をあてて心闇の世界で繰広げられる不可視的な文学創造の営為をひきだし、それを解明する論理において「曲盡」であったとする誇りと確信を消し去ることはできないであろう。陸機が形式主義文学理論の構築にみせた独創性が、次に来たる齊梁時代に、劉勰の『文心雕龍』の精緻な修辞美学、永明文学の精密な音韻聲律論等の成立を導き、豊饒な中国文学の可能性を発見し約束したことだけで充分なはずである。

六

「文賦」の独創性を考える際に、まず誰しもが指摘する想像力理論がある。意と物と文、構想と対象と言語表現の三者の関係に着目して、そこから言語における形象化理論の究明にすすんだ陸機は、三者の間の緊張関係をもたらし、そこにリアリティを保証するものが作家の想像力であるとみていた。

其の始めや、皆收視反聽、耽思傍訊す。精を八極に馳せ、心を萬仞に遊ばす。其の致るや、情曈曨として彌鮮かに、物昭晰にして互に進む。羣言の瀝液を傾け、六芸の芳潤を漱ぐ。天淵に浮んで以て安流し、下泉に濯いで潛浸す。是に於て沈辞怫悦として、遊魚の鉤を銜んで重淵の深きに出ずるが若く、浮藻の聯翩として翰鳥の繳に嬰りて曾雲の峻きより墜つるが若し。

作家の構想が対象をかりて言語表現として定着されるためには想像力の媒介が必要である。いつさいの目と耳に訴えかけるものを拒絶し、ひたすら自己の内なる構想に精神を集中して思いを深め、世界の果て萬仞の高さまで想像力を縦横に働かせてゆくことによって、はじめはおぼろげであった構想と対象の全貌がしだいに明晰になってくる。そこまでくると構想と対象に密着した言語の撰択にすすみ、「沈辞怫悦として、遊魚の鉤を銜んで重淵の深きより出ずるが若く、浮藻の聯翩として翰鳥の繳に嬰りて曾雲の峻きより墜つるが若く」文章表現に定着するようになる。――かく考える陸機の想像力理論は想像力のなかで構想と対象の明晰化をさぐり、それを表現するにふさわしい言語の現実性を作家と作品に要請するものである。

彼がまた「文賦」の別の箇所で、「古今を須臾にみて、四海を一瞬に撫える。澄心を罄して思を凝らし、衆慮を眇かにして言を為す。天地を形内に籠め、萬物を筆端に挫く」と、重層的な対句構成のなかでたたみかけるように、然も注意ぶかく伝達しようとしたのも構想力と想像力の作用の問題であった。

文学創造が現実に生起するさまざまな人事によって触発され、そこに興味ある題材を取ることもたしかなことであるが、それが想像力をかいくぐって豊かな言語形象として表現に対象化されないかぎり、現実的実感の伝達は閉ざされ、芸術的感動は喚起されずに終ってしまうことを陸機は実作者としての自己の創作体験をとおして認識していた。「文賦」の想像力理論はその実作者としての認識の論理化であり、対象化であった。

陸機は現実とかかわりあう作家の意識を対象化して論じてはいないが、作家が訴えたいとのぞむ思想の伝達にはふかい関心をはらうがために、内容と表現、論理と修辞が一致すべきであると説いている。

理は質を扶け以て幹を立て、文は條を垂れて以て繁を結ぶ。信に情と貌の差わざる。故に毎に變じて顔に在り。思い楽しみに渉れば其れ必ず笑い、方に哀しみを言いて已に歎く。

ここにいう「理」は論理であり、「文」は修辞である。論理は文章内容の伝達に重きをおき、修辞は文章の美の伝達に重きをおく。情と貌がたがわずに一致することは論理的内容と修辞的美観の統一を意味しており、それがもとより文章叙述の重要条件であることは古今を通じて変らぬ命題である。然しながら「文賦」を総体的に観照するならば、文章創造の技術論的側面に陸機の注意はより多くはらわれ、修辞美学の側面に陸機の思考はより強く傾むいている。

「文賦」が文章の音楽的な美観をとりあげているのはその顕著な例証であり、想像力理論とともに、言語の音聲に留意して、その組織的配合によって音楽的な文章美を造型しようとする音韻修辞説は、陸機の独創的見解であった。

其の意に會するや巧を尚び、其の言を遣るや妍を貴ぶ。音聲の迭に代るに暨んでは五色の相宣ぶるが若し。逝止の常無きは固に崎錡として便じ難し。苟に變に達し次を識らば、猶お流を開いて以て泉を納るがごとし。如し機を失いて後に會し、恒に末を操りて以て顚に続けば、玄黄の秩叙を謬まり、故に洪涸りて鮮かならず。

五色のぬいとりのように鮮かに、濁りのない美しいひびきをもつ文章をつくりあげるためには、一つ一つの言語の

音聲の特質をおさえて、秩序ある配合と組成を考えて文章に運用せねばならぬとする陸機は、音韻聲調に相当自覚的であったとみてよかろう。

周知のように、このような陸機の聲調修辞説が、平仄法、押韻法などの具体的な詩律の方法として理論化されるに至るまでには、齊の永明文学の担い手である謝眺、沈約、陸厥の出現を待たねばならない。沈約は「騒より以来、此の秘未だ覩ず、高言妙句に至りては音韻天成し、皆闇に理と合するも、思の至るに由るに匪ず。張・蔡・曹・王に嘗て先覚無し。潘・陸・顔・謝は之を去ること彌遠し」（宋書・謝霊運伝論）と論じ、自分達が出現するまで、中国語の聲調の変化を自覚して、それを意識的に運用した文人はいなかったという。陸機も又この例外ではなかったとする。この沈約説に真向から反論したのが、僚友の陸厥の「与沈約書」であった。

魏文は論を属り、深く清濁を以て言を為す。劉楨の書を奏して大いに体勢の致を明かにせしより、岨峿妥帖の談、末を繰りて顚に続くるの説、玄黄を律名に興し、五音の相宣ぶるに比すという。苟に此の秘未だ覩ずんば、茲の論は何の指す所と為さんや。故に愚謂らく、前英已に早く宮徵を識るも、但だ屈曲に指的すること今の論の申ぶる所の若くならざるのみ。（南齊書・陸厥伝）

この陸厥の反論が陸機の「文賦」の中の聲調修辞説の発言をそのまま文中に溶解して立論しているところが皮肉で面白い。陸厥は聲調音韻の自覚は魏の曹丕の『典論』論文の「気に清濁有り」の説あたりからはじまるとみているが、これが言語の音聲美に意識的に留意しての発言であったとは認めがたい。そこにくると、陸機のそれは本格的な聲調活用論である。その点でいえば沈約の「潘・陸・顔・謝は之を去ること彌遠し」の発言は陸機に限り不当であるために、却って陸機説をおさえたとみなされないことはない。沈約にはもともとそういう性癖があって、『宋書』の編纂の場合も裴松之等の資料捜集を踏えて完成に漕ぎつけたという事情があるにもかかわらず、『宋書』編纂の功を沈約自身の手に帰せしめるために、前段階の歴史家に後継者の存在してあることを意識的に抹殺しようとした事実がある。[7]

陸機は「文賦」で言語のもつ音聲の調和的運用が文章修辞の美的発現にかかせないものであることを強調しているが、もともと彼は音楽について相当に強い関心を持っていたごとくである。陸機の伝記に残された著書に、その関心を実証する資料をみつけることはできないが、「文賦」の論述を追っていると、まるで音楽論でもあるかのように、文章の利害巧拙を論じて譬を音楽に求めていて、それが陸機の音楽への深い造詣と強い関心を物語っている。このことは従来あまり注意されていないようであるから、「文賦」の論述は、なんらかのかたちで音楽に託された比喩的表現が取込まれている部分をとり出し、注意を喚起したい。[8]

文章の五つの病について論じたところが。「文賦」の中にあるが、その一条一条の後に必ず音楽的比喩をはさみ論述を結んでいる。

①孤立的な短い文章はいけないと論じて「偏絃の独り張れるに譬え、清唱を含むも応ずる靡し」と述べている。

②巧みな句と拙ない句が雑っている文章はいけないと論じて「下管の偏疾に象たり。故に応ずると雖も和せず」と譬え、下管つまり儀式の際に笙などの管絃楽器を主体として演奏されるやたらと急激な音響にみたてている。

③奇抜な表現をねらい内容をおろそかにして浮ついた文章はいけないと論じて「猶お絃の幺くして緻の急なるがごとし。故に和すると雖も悲しまず」と譬えている。

④調子ばかりよくても通俗的な文章はいけないと論じて「固に聲高くして、曲は下し」と述べている。

⑤簡約にすぎて味わいの少ない文章はいけないと論じて「大羹の遺味を闕き、朱絃の清汜なるに同じ。一唱して三歎すと雖も、固に既に雅にして艶ならず」と述べ、清廟の朱絃の音楽が淡く質朴なのに譬えている。

この他にも、すぐれた言葉が衆辞とかけはなれてあるのはかえってすばらしい趣きを出すものだと論じて「下里を白雪に綴るも、吾亦た夫の偉とする所と済す」と譬えているし、微妙な文章の変化には精通しにくいと論じて「譬えば猶お舞者の節に赴いて以て袂を投じ、歌者の絃に応じて聲を遣るがごとし。是れ蓋し輪扁の言うを得ざる所なり」

と述べている。

七

胡応麟は陸機が「文賦」で先行作品の模倣に終ることを強く否定し、独自の言語で独創的な文章を作らねばならぬと論じているが、陸機の実作においてみれば、その理論は破産しているのではないかと批判している。

士衡云う。「朝華の已に披けるを謝り、夕秀の未だ振わざるに啓く」と。又云う「片言を立てて要に居くは、乃ち一篇の警策なり」と。其れ陳言を濯いて絶足に馳するの意有り。然るに平原の諸文は模拟何ぞ衆くして創獲何ぞ希なるや。平原の諸詩は藻絵何ぞ繁くして独造の何ぞ寡きや。故に曰く之を知るの難きに非ず、行うの難きなりと。（詩藪・外篇二）

この胡応麟の批判は皮肉である。認識と実践の喰違いを指摘して、実践がいかに困難であるかを述べるにあたって、わざわざ「文賦」の発言をそのまま織込んでつかっているのがそれである。

魏晋時代の詩文は、陸機のみでなく、先行作品を擬したものが多い。それは曹丕、曹植、張華、潘岳、左思、束晳といった当時の代表的な文人に共通しており、模擬による作品制作はこの時代の宮廷文人がとおらねばならぬ習練であり、できなければならぬ遊びであり、いわば至極普遍的な文壇の常識的な作法であった。模擬作品の制作は単に楽府題の詩の領域にとどまらず、辞賦や古詩等の文学全般の領域にまで及んでみられる現象であった。しかしながら模擬とはいえ、先行作品に題やモチーフを借りることはしても、それぞれの構想、内容に変化があり、措辞、句作りにおいても独自の工夫がほどこされていた。云換えればこの時代の文人は古典的な作品を模擬し補亡する作業を己に課することによって、独創的な文章を獲得する習練につとめたのである。

とりわけ陸機の場合、彼の特意としたものとして、擬古詩、擬楽府の詩群を忘れることはできない。梁の鍾嶸が

「才高く辞贍に、挙体華美」なる陸機の詩を評して「規矩を尚びて綺錯を貴ばず。直致の奇を傷う有り。然れども英華を咀嚼し、膏沢を厭飫して、文章の淵泉なり」（詩品・上品・晋平原相陸機）と論じているように、先行するすぐれた文学的伝統の典型を尊ぶ陸機はむやみに改錯するかたちで、擬古詩の制作に取組まなかった。しかもより多く過去の文学の英華と膏沢を吸収消化することにつとめた陸機の文学が文章の淵泉そのものとなったと指摘する鍾嶸の見解は正しい。

陸機は「遂志賦」の序文のなかで「昔、崔篆は詩を作り以て道を明らかにして志を述ぶ。而して馮衍も又〈顕志賦〉を作り、班固も〈幽通賦〉を作り、皆相依りて焉に倣う。張衡の〈思元〉、蔡邕の〈元表〉、張叔の〈哀系〉は此れ前世の言を得べき者なり」（芸文類聚二十六）と語っているように、「相依りて焉に倣う」文学制作の方法はなにも恥ずべき隠蔽すべき方法ではなく、中国文学においては優良な文学伝統の継承発展に欠かせぬ手段とみなされていた。ここで陸機は漢代辞賦文学にみられるモチーフの踏襲と継承の系譜をおさえて、各々に繁簡、雅俗、哀怨の表白の様態に違いがあることを認めながら、その文学制作史の過程を正当であると認識している。[9]

「文賦」のなかに、この認識を再確認するならば、「世徳の駿烈を詠ひ、先人の清芬を誦し、文章の林府に遊び、麗藻の彬彬たるを嘉みす」というように、文学の宝庫に遊び、美しい文章を鑑賞する過程をかいくぐった上で、「百世の闕文を收め、千載の遺韻を采り、朝華の已に披けるを謝り、夕秀を未だ振るわざるに啓く」独創の道に入ることになる。それでもなお場合によっては、できあがった文章が「藻思綺合し、清麗千眠・炳として縟繡の若く、悽として繁紘の若きも、必ず之に擬する所に殊ならず、乃ち闇に曩篇に合う」こともありうるとみる。その時には「予が懐に抒軸すると雖も、佗人の我に先んずるを怵れ、苟に廉を傷り義を愆れば、亦愛すると雖も必ず捐つ」という峻烈な制作態度を要求している。

繰返すようではあるが、陸機の「文賦」は自己の創作体験にもとずいて、先行する文学者達のすぐれた創造の道を

追体験するなかで、作家の情志と言語形象の微妙な相関関係を論評の対象として分析した内在的な創作理論であった。しかもそれは、中国文学史の上で、郭氏の所謂「騒」路線に飛躍的な発展の契起をもたらす本格的な形式主義文学理論であったという意味で、曹丕の『典論』論文の外在的批評をはるかに凌駕して、各時代の文学創造にたずさわる者の心をとらえるだけの影響力と、したたかな独創性をそなえていた。

毛詩大序の言志的文学観が規定した現実参加の文学は中国文学を貫ぬく不変的伝統的な文学精神の形成に大きな役割を果してきたが、ややもすればそのために、時の政治権力に愈着し、常識的な道徳律と結託する傾向を助長してきた。中国において文学が政治や道徳にくらべて第二義的な価値しか付与されなかったのも、この儒教の言志的文学観によるものであった。逆説的に云えば、陸機の「文賦」は所謂形式主義的文学理論に執することによって、時の政治権力と愈着したり、俗情との結託をはかることなく、文学の内在的な自律性を獲得することができたのである。

陸機は儒教の言志的文学観と絶縁し文学創造の根源に情動のはたらきを見据え、それを重視した。それは「文賦」の「其れ六情底滞して志往くも神留まるに及んで、兀たること枯木の若く、豁たること涸流の若し」という発言に典型的にあらわれている。詩言志説に対して詩縁情説を出し、詩は本来的に綺靡（美）の発現をめざすべきであるとする詩説は舊套を脱して頗る斬新であり、それ以後の六朝詩史の方向を決定づけたことで画期的であった。[10]

しかも「文賦」が文学創造理論を説くにもかかわらず、「論」の散文様式をとらわれずに、賦の様式をかりて四六駢麗文で表現されてあることは興味深い。そもそも駢麗文がめざしたものは、言語における虚構美の発見であり構築である。自然の美と対応する緊張したもう一つの美の世界を造形できるのは人間の智恵であり理性であるとする認識はすでに陸機において自覚的であった。その証拠に、彼はこの駢文を駆使して実作者の内面に即しながら文学創造の不可視的ないとなみを解明し描破することができたのである。その意味で六朝文学の美意識の創造とその理論化は陸機の「文賦」によってはじめて確立したとみるべきであろう。

註①岡村繁氏の「曹丕の典論論文について」（「支那学研究」二四・五合併号）が考証する典論論文の制作年代を参照。

②目加田誠氏の「六朝文芸論覚え書」（『風雅集』所収論文）は六朝文芸論に現われた気の概念の由来とその展開にふれている。

③伊藤正文氏の「劉楨詩論考」（近代・第五十一号）が曹丕の「与呉質書」を引いて「公幹に逸気有り、但だ未だ遒（かたまら）（不安定の意か）ざるのみ」と読んでいるのは「遒」の字の訓に苦心の跡がうかがわれる。拙論は班固の「答賓戯」につかわれた「遒」の字に、李善がほどこした注にならっては「逸気有り但だ遒（うつく）しからざるのみ」と読んでおくが別に定見あってのことではない。

④郭紹虞氏の『中国古典文学理論批評史』第四章の一「形式主義文論の萌芽」の条りを参照。

⑤小尾郊一氏の「陸機の文賦の意図するもの」（「広島大学文学部紀要」三八―一）から拙論が教示を受け触発されたものは大きいが、文賦の制作年代を陸機の呉在住時の二〇才とする説においているためか、文賦は後漢、建安、正始の文学の風気とは不連続であるとみているのには、必ずしも賛成できない。

⑥陳正驥の制作年代考証は Literature as Light against Dakness の第一章において展開されたものである。この部分の邦訳に「陸機の生涯と文賦制作の正確な年代」（一海知義訳「中国文学報」第八冊所収）がある。

⑦拙論「裴子野〈雕蟲論〉考証」（「日本中国学会報」第二十集）は、唐の歴史家劉知幾がその『史通』で沈約の『宋書』における曲筆ぶりを批判している記述を紹介しているので参照。

⑧小尾郊一氏の前掲論文の注に、饒宗頤氏の「陸機文賦理論与音楽之関係」（「中国文学報」第一四冊）が音楽理論を借りて、文章の法を述べている所があると指摘しているとあるが、拙論は饒宗頤氏の論文を入手できずに未見のままに稿をすすめねばならなかったことをことわっておく。

⑨陸機の「遂志賦」は拙論が本文で引用した部分につづいて「崔氏簡而有情。顕志壮而泛濫。哀系俗而時靡。玄表雅而微素。思玄精練而何惠。欲麗前人而優游清典。漏幽通矣。班生彬彬。切而不絞。哀而不怨矣。崔蔡沖虚温敏。雅人之属也。衍抑揚（これ）頓挫。怨之徒也。豈亦窮達異事而聲爲情変乎。余備作者之末。聊復用心」とあり、これで序文を終っている。「相依りて焉に倣う」作品が各々に簡繁、雅俗、哀怨の表白において差があることを批評したものである。

⑩拙論「漢魏六朝文学論に現れた情と志の問題」（『目加田誠博士還暦記念中国文学論集』所収）において、毛詩大序の詩言志説が載道文学説につながってゆく傾斜を内包しているのにたいして、陸機の文賦は儒教的文学観にとらわれずに情感の作

用を重視して詩縁情説をたて、六朝文学論の情性吟詠説を導くに至った事情を情と志の概念使用例の分析を基軸にしながら解明している。